

社会革命派の誕生

1

日本無政府共産党——と言っても、今日では、かつてかかる党が存在したことすら一般には忘れ去られ、わずかにアナキズム運動史の片隅にその名をとどめるにすぎない。アナキズム運動の内部においても、ごくわずかな例外はあるが運動史的位置づけや評価はおろか、まともな論じられることさえなく、せいぜい戦前の運動の終幕を飾る八事件Vとして苛だたしげに語られるぐらいのものであった。

後述するように、日本無政府共産党（以下、無政府共産党または単に党と略す）が革命運動に投げかけた問題は決して小さくなく、しかも四十年後の今日においても問題は依然として未解決であるにもかかわらず、党とそ

蓮 台 寺 晋

の活動は見事なまでに無視されてきたのである。そこには、党がかなり厳密な秘密結社で実態を知る人が限られていたことや文献がほとんどないといった事情があるにせよ、もう少し深い理由があったはずである。

ところで、後世の評価で思い出したが、党の委員長であった植村諦が真木泉の筆名で残した回想（黒旗は破れた）が興味深い場面を伝えている。昭和九年四月の中執で特務機関の権限をめぐって目的と手段に関する激しい論争が交わされた際、手段を選ばなければ「後々まで無政府主義運動のために悪影響を残す」ことになるという植村の危惧に対し、二見敏雄が興奮して次のように叫んだ、というのである。

「後世に誤解される？ 君はまだ何十年も先までわれわれの運動が残っているのか。たたかいはもう始ま

ってしまっているんだ。勝つか、敗れるか、ただそれだけじゃないか。そのたかきに勝つことだけがそのような誤解をなくするんだ。敗ければ何をやっても誤解される、いやあらゆる悪罵の対象にされるだけだ。……」(本書一四八頁)

二見の予言は心ならずも的中したかたちとなり、敗北し壊滅した無政府共産党は、もっぱら「事件」/としてセンセーショナルに取り上げられ、中傷と悪罵の対象となっていく。「非常時下のテロ計画」「銀行ギャングの首魁逮捕から一斉検挙着手」「暴力革命を企らむ」「無政府共産党の全貌」「非常時下に蜂起を画す」「党のために身を売って、黒に躍った紅一点——」「資金獲得に辻強盗も計画」「黒色ギャングのシンパ」……こうした当時の新聞の見出し(秋山清「無政府共産党事件」による)を見るだけでも、党がどのように扱われたか、およその見当はつけられよう。新聞報道ばかりではない、評論家は無論のこと、かつての同志たちの一部からも悪意に満ちた非難の集中砲火を浴びたことは、植村の伝えるところである。

そして、ファシズムの前に一切の運動が敗北し解体し、やがて党も忘れられていった。あたかも、それが敗

北した秘密結社の宿命であるかのよう。

とはいえ、無政府共産党が誤解され、中傷され、忘れ去られていったのは、必ずしも二見が言うように敗北したせいではなく、逆に植村が言うように手段を選ばなかったせいでもなかった。もちろん、それらも大きな原因の一つには違いないが、戦後三十年近い時間が経過しているにもかかわらず、党の総括が問題とならなかったことは、むしろ逆にその後のアナキズム運動の側に問題があることを示唆しているのではないだろうか。

アナキストの多くは、ともすれば「あんなものはアナキズムではない」と決めつけ、それで安心して事足りれりとしがちである。無政府共産党もしばしばその一言で片付けられてきた。だが、あえて言えば、アナキズムであるか否かが問題なのではない。われわれにとって問題なのは、そうした既成イデオロギーによる色分けではなく、社会革命をいかに遂行するか、なのである(アナキストといえども、始めは、否定的現実から変革を求め、その過程で媒介としてアナキズムを選んだものではなかったか)。戦後アナキズムによる無政府共産党の無視ないし無関心は、戦後アナキズム運動の衰退と低迷を自ら暴露していると言っても決して過言ではないのである。

私がいま無政府共産党に注目するのは、無政府共産党こそアナキズムに発しながらそのイデオロギーの呪縛をこえて社会革命を追求しようとした数少ない先駆的運動の一つであったと考えるからである。われわれはこの先人の苦闘の跡を、涸渇したイデオロギーによって切り刻むのではなく、われわれ自身の未来を切り拓く媒介として今日に生かすべきではないだろうか。

2

無政府共産党は「政治的権力を武力的に獲得するためにそれ自身武装せる党の建設」を主張した点で、従来のアナキズム運動とは明らかに異質のものである。党は、それを「アナキズムの行動の方法に対する重大なる修正」と認めつつも、「敢えて発展」と言うのである(一八六頁)が、常識的に言えば、権力奪取を認める限り、もはやアナキズムではなく、ポリシエヴィズムに近い。アナボル論争の最大の争点は権力奪取を認めるか否かであったはずである。

しかしながら、無政府共産党が、党員の構成においても心情においても、アナキズムから出発していることもまた糾りもない事実である。幸か不幸か党員には一人も

ポリシエヴィキ出身者がいなかったし、何よりも純正無政府主義者の牙城全国自連の機関紙を継承した「自由連合新聞」の編集部が党員によって占められていたことは象徴的であろう。

この落差——一見したところアナキズムを否定するかに見える党が、他ならぬアナキズム運動の内部から生じたということは、一体、何を意味するのだろうか。

言うまでもなく、運動は抽象的な一片のテーゼによって展開するものではない。現象的にそのように見える場合も、運動の内部にすでにそれを受け入れる現実的基盤がそれなりに形成されているはずである。われわれも、この党の論理を検討する前に、党員となるアナ系の活動家たちがどのようにしてこうした主張に行きついたか、その運動史的根拠をつきとめることから始めよう。

無政府共産党党員のなかでアナキストとして活動歴が最も古いのは、芝浦労働組合にいたことのある梅本英三であろう。司法省刑事局『日本無政府共産党関係検挙者身上調査書』によれば、梅本は「……大正十一年同工場ニ於ケルアナ系タル芝浦労働組合ニ加入シ組合機関紙ヲ通シテ無政府主義ニ関心ヲ持チ、大正十二年十二月大杉栄著『日本脱出記』『クロボトキン研究』等ヲ購読シテ

ナキズムヲ信奉スルニ至リ、其ノ研究ヲ志シテ大正十四年一月日本労働学院ニ入学セリ、其ノ後実践運動ヲ志シ」云々とあるから、彼がアナ系の運動を知るのは大正十一年（一九二二）、活動を開始するのは十四年以降ということになる。他の党員の大半も大正末から昭和五年頃までにそれぞれ活動を開始している。日本のアナキズム―サンジカリズム運動は、一九二三年九月の関東大震災に際し官憲の手によって大杉栄・伊藤野枝を奪われ、その後の「方向転換の嵐」の中で次第に労働運動における足場を失っていくのだが、党員の多くはその衰退過程の初期にアナキズムにふれ、逆流の中で新たな活動形態を必死に模索していくのである。

一九二三年と言えば、日本のアナキズム―サンジカリズム運動がその頂点に達していた頃であるが、この年ベルリンで開かれる予定の国際アナキスト大会出席のために日本を「脱出」した大杉栄は、伊藤野枝に宛てた書簡のなかで、組織問題にふれて次のように書いている。

「社での問題の、結局は大眾と共にやるか、純然たるアナキスト運動で行くかは僕もまだ実は迷ってゐる。純然たるアナキスト運動と云ふ其の事に僕はまだ疑ひを持ってゐるのだ」（アルス版『大杉栄全集』第四巻五二

この記述は簡略ながら、アナキズム運動において組織問題がどのようにとらえられていたかを示し、同時に日本アナキズム運動の当時の水準を明らかにしてくれる。当時、ロシア革命の変質を最も早い時期に見抜いてすでにその批判を開始していた大杉ら労働運動社には、ボリシェヴィキ批判にとどまらずそれに代わる革命論の構築、とりわけ実践的組織論が求められていた。それと共に、アナボル協同戦線の総括とも関連して、「白紙主義」からの脱却が問題となる一方で、岩佐作太郎による労働組合山賊論も論議的になっていたのである。大杉の手紙は、この段階で、労働運動社の内部でも組織問題に関しては原則の方針さえ確立されていなかったことを率直に語っているのである。

ここに、昭和に入ってからのアナキズム―サンジカリズム運動の衰退の重要な主體的根拠があったと言えよう。

もっとも、大杉自身は、在仏中のロシア革命の研究や組織活動の体験を通して、組織問題を前述の二者択一的選択ではなく、両者を統一的立体的に把握する視点を獲得し、帰国と同時にその実践に向かっていた。おそらく彼

は、アナキストの強固な結合体と労働者の組織化を同時に追求し、前者を媒介とし後者を主体とする革命運動を構想していたものと思われる。ちなみに、彼が高く評価し学ぼうとしていた「無政府主義將軍」ネストル・マフノは、アナキスト組織のメンバーが農民連合の組織化を積極的に進め、その先頭に立つて戦い、アナキスト組織と農民連合を親密にすることを主張し、外部からの思想的影響にとどめようとするアナキストたちを粘り強く説得しているのである（マフノ『ウクライナにおけるロシア革命』。なお、大杉の組織論については滝沢俊二「大杉栄とロシア革命」、『R』11号参照）。

大杉の構想は、彼の突然の非業の死によって結実することなく終わるが、形態的には、彼の死から三年後の一九二六年に至って黒色青年連盟の結成および全国労働組合自由連合会が成立することによって一応の実現をみたといえよう。運動を盛り返そうとすれば、アナキスト組織も大衆組織も共に必要となるのである。大杉虐殺に報復しようとテロリズムに傾斜していったアナキズム運動も、ようやく運動の組織的再建を図ろうとしたのであった。後の党員たちがこれに積極的に加わっていったのはいうまでもない。

しかしながら、アナキズム―サンジカリズムの退潮を反映してか、各々の内実、相互の連関は、大杉のナイーヴな感性と柔軟な思考に支えられた革命的積極性からはすでに遠ざかっており、後ろ向きに硬直したイデオロギ―に急速に呪縛されていく。純正無政府主義の影が次第に運動をおおい、消耗な内部抗争の季節が訪れるのである。

八太舟三、岩佐作太郎に代表される純正無政府主義は、一面で体制内労働組合の限界を鋭く衝きながら、それを超える運動を現実的革命的に提起せず、サンジカリズムを排撃し、観念的教条的にアナキズムを純化しようとするものであった。例えば、八太は、日常闘争はすべて改良であると決めつけ、「吾人は労働組合の日常行為に解放の基調を置くのではなく、自由連合主義を鼓吹して、労働者の間から解放の闘士を見出そうとするのである」（『階級闘争説の誤謬』）と述べているが、これでは大衆組織を思想団体と二重写しにして大衆から浮き上がり、ひいては運動全体を弱体化させるばかりであろう。

実際、当時の運動方針が述べられた論文（太田季吉「無政府主義の拡充」、『黒旗』創刊号一九三〇年一月）、を見ると、労働運動社はいまいなものとして否定的に

総括し、運動を本気ですべて思想運動に集約してしまっているのである。同じ号で、岩作は去る者は去れと言いい、八太は人為的な組織を強権的なものとして全否定しており、運動に対する消極的姿勢と理論的貧困はおおむべくもない。

純正無政府主義は、うわべの革命的言辭とは裏腹に、社民およびボリシェヴィキの浸透を無意識に追認する役割を果たしており、その本質は主体形成抜きの特機主義にあった。このヒステリックな特機主義はダイナミズムの喪失をもたらし、必然的に運動の退廃につながっているのである。

秋山清は当時の運動の状況を次のように回顧している。

「ボルであることが対立と否定の原因乃至帰結であって、それについて研究の又は批判的態度すら、あいまいだとして許されざるものとなった。それが嵩じて、一切の組織、如何なる規約すらも、中央集権の萌芽と見る気風が起つてきた。労働運動において組合を拡大しようとする運動、規約綱領を守ろうとすること、生活条件改正を要求することすら、それは現状肯定、現状維持の思想であるとして、だから反革命態度であるとして排撃さ

れ、袋叩きにされるに至った」(前掲論文)

そして、「このような状況とともに、かなり多数の人々が、組織否定の不満に端を発して離脱していった」のである。

・気がついてみると、大衆団体であったはずの全国自連はサンジカリストと分裂し思想団体のようになって、量的にも激減し、アナキスト集団の連合体であったはずの黒色青年連盟は「黒連」と呼ばれる排他的な少数者のセクトと化してしまっていた。

内務省警保局『社会運動の状況』によれば、三〇年にはそれでもなお五〇〇名を数えた黒連が、三二年はわずか三〇名ほどになり、同じ時期に労働者も二二〇〇名(自連一六七九名、自協五六六名)から九〇〇名ほど(自連五五〇名、自協三七〇名)へと著しい凋落ぶりを示している。この数字をそのまま信用することはできないにしても、そこから全体の趨勢を読み取ることが可能であろう。純正無政府主義者の主張した思想的純化の後も運動は衰退し続け、サンジカリストも一つの壁につき当たっていたのである。

しかしながら、いかにイデオロギー的に呪縛され硬化したとはいえ、運動の衰退と退廃が行きつくところまでを図って果たさず、自己のグループ内においても運動展開に行きつまった二見は、アナキズムの方法論を次のように再考している。

「……従来ノ無政府主義者ハ民衆ノ自治能力ヲ過大ニ評価シ、民衆ハ寧ロ先天的自主自治能力ヲ備フルモノニシテ其ノ能力發揮ヲ妨グベキ諸条件ダニ無政府主義者ニヨリテ排除セラルトキハ、同主義革命ハ容易ニ完成スルモノノ如ク樂觀スト雖モ、現実ノ労働者農民等民衆ノ意識並自治的建設能力ハ爾ク大ナルモノニ非ザルヲ以テ更ニ其ノ意識ノ宣揚ノ努ムベキノミナラズ理想社会実現ノ為一步前進的方法トシテ、全民衆ノ自治能力ノ完成ヲ俟タズ、無政府主義者ノ強固ナル組織ヲ結成シ、其ノ意識的、目的的活動ニ依リテ同主義革命ノ実現ヲ図ラザルベカラズト信ズルニ至リタルガ、……」(『日本無政府共産党事件第一審及第二審判決』、司法省刑事局『思想資料パフレット特輯』による)

この間に、社会情勢も急激に変わってきていた。ファシズムと帝国主義戦争はそこまで迫ってきていた。日本帝国主義は一九三一年に中国侵略を開始し、翌三二年には五・一五事件が起き、社民は急速に右傾化してゆくのである。三・一五、四・一六の弾圧をくぐり抜

行くと、現実を直視し、イデオロギーそのものを再検討しようとする動きが当然出てくる。ラディカルな心情は、革命的言辭を弄することですらでも満足しているわけにはいかない。過去の運動の真摯な自己批判の上に現実の変革が追求されるのである。

純正無政府主義の実践的否定は、まず農村青年社の運動によってなされた。彼らは、純正無政府主義の胎内から生まれ、その主張を徹底化することによって、すなわち結成主義的人為的組織を全否定し、農村において一挙にコミューンを樹立しようとして、日常闘争の積極的肯定に行きつくのである。しかしながら、闘争の意識的推進は一方で組織的結合の必要性を生み出すにもかかわらず、農村青年社がイデオロギー的にそれを拒否した時、その運動は農村の自然的組織の中にいつしか吸いこまれていった。

その頃、後の黨員たちもそれぞれの場所で彼らなりに農村青年社とは逆の方向、組織の肯定に出口を見出そうとしていた。彼らの大半も、純正無政府主義の胎内に生まれ、その実現を真剣に追求するなかで、その実践的否定者となっていくのである。

例えば、アナキストの戦線を立て直そうと黒連の再建

けてきた日共も三二年の熱海事件で大打撃を受け、翌三年には全協中央部が全滅、佐野・鍋山の転向声明が出て、三五年三月には壊滅するのである。

無政府共産党は、こうした情勢への危機感と強固な実践倫理をバネに、純正無政府主義から出口を求め試行錯誤を重ねてきたアナキ系の活動家たちが、回り道のあけくに出した組織問題に対する有力な回答だったのである。

3

アナキズムは組織を否定する、というのはアナキスト自身でさえしばしば陥る謬見にすぎない。アナキズムは強権的組織を否定するが、自律的・連合的組織は肯定し、積極的に増殖しようとするのである。

だが、「党」ということになる、強権的組織の代表的存在としてアナキストが攻撃して止まぬものであった。

それ故、アナキズム陣営の真っ只中から生まれてきたこの集団が、正面から「党」を名乗るには、相当な根拠と決断があったと見なければならぬ。

植村の回想は、無政府共産主義者連盟から党への改称に当たって、党を「現実的な必要手段」と見るのに、ま

ず「内部にあっての大きな飛躍がなければならなかった」ことを認め、「あえてわれわれが『党』を称したのは、従来のごとく運動の中に個人の「○○パーセント」自由を生かさんとするよりも、己を死なせてなお革命運動に自己を生かし理想を貫き、現実を変革せんためという思いであった」(一四二頁)と、その心情を語っている。

このような心情は、おそらく党に結集し、もしくは支援した当時の活動家に共通するものであったろう。

しかしながら、党の理論は、活動家の心情に見られる党の消極的肯定にとどまらず、ロシア革命の総括から過渡期論を展開し、党のより積極的肯定へと踏み出していった。

無政府共産党の理論は、本書に収録された二つのパンフレット——「無政府共産党テーゼ」および「プロレタリアの戦略戦術」——の発見によって、ようやくその全貌を現わすことになったと言えよう。党を単なる「事件」や「エピソード」としてでなく、それらを含む「運動」として、その主張に即して検討することが可能となったのである。今後は、これらの文書をネグレクトして党の批判や評価はなしえないであろう。

これらの文書の成立事情や他の文書との関連について

は相沢の回想に詳しいのでここでは繰り返さないが、党の論理ないし主張はここにはぼつと出ているとみて差支えあるまい。党の理論は、過渡期の検討から権力掌握の必要性、そのための党建設を説いているいわば無政府共産党なりの社会革命論と、それを踏まえて当時の日本の現実を分析し戦略戦術を具体的に提起したものにとまらず大別できるが、前者に「テーゼ」が、後者に「戦略戦術」がそれぞれほぼ対応するのである。

党テーゼは、まず「プロレタリアの解放は政治や権力の主権の交替や変更が目的ではなく、その廃止であり、これに代わる自治の制度と組織以外にあり得ない」ことを確認し、「今日における無政府主義者の理想」として次の八項目を掲げている(一七二頁)。

- 一、権力政治の撤廃
- 二、完全なる自治制の確立
- 三、私有財産制度の廃止
- 四、生産手段および土地の共有
- 五、賃銀制度の撤廃
- 六、労働者農民の生産管理
- 七、教育文化の享有
- 八、人為的国境の撤廃

この要約自体は従来からアナキストが考えていた線に沿っており、取りたてて目新しいものではないが、「この理想を一定の条件の下においては実現し得る」と主張している点が注目を惹く。唯物史観に基礎づけられたマルクス主義が労働者の中に浸透するに従って、アナキズムも現存社会を否認し、これにいきなり理想社会を対置するだけでは十分な説得力を持たなくなり、その実現の可能性が具体的に問われていた。党はそれに応えて社会革命のプロセスを具体的に解明しようとするのである。

その条件を党は、(一)生産力の発展(二)資本主義の打倒(三)意識の変革、の三つに要約する。

ここで生産力の発展をあげたことは、アナキーが空想ではなく実現可能な理想であることを強調する意味で、当時としては、不可欠の条件であったと言えよう。ただ、「生産力を益々発展せしめるためには、その現実の妨害の条件」(資本家の利益のための生産という方法)を除かねばならぬ、として一に二を結びつけたのは、論理的整合性を急ぎすぎたのではないだろうか。生産力と生産関係の矛盾を指摘し、その矛盾の解決が生産手段の社会化にあるとしたのはよいが、資本主義を生産力の発展の妨害要因としてのみ捉えるのは疑問である。資本主

義に生産力の発展を妨げる一面があるにしても、その打倒の必要性は別の面、すなわち、労働の疎外から論ずべきであろう。党がこうした論理を採ったのは、当時のマルクス主義の生産力主義の傾向の影響であろうか。

ともあれ、ここまでの論理は、テーゼ自身クロボトキンを用いているように、未だ既成のアナキズムの枠の中に収まるものであった。党が独自の論理を打ち出すのはその先である。

テーゼは、レーニン主義者によるアナキズムの戯画化——革命の翌朝アナキー社会が実現される云々——をきっぱりと否認し、マラテスタを援用しつつ、「社会革命は長き闘争の累積である」と規定して、過渡期の問題に正面から立ち向かっていく。

ところで、ここでマラテスタを引用したあたりに執筆者の苦心のほどが窺われよう。マラテスタは、経験豊富な実践家で一定の柔軟性は持っていたが、反面でモナトやアルシノフとの論争で知られる反サンジカリズムの闘士・反綱領主義者でもあったからである。彼の『無政府論』は、過渡的綱領の現実性を暗に認めながら、自らはそれを採っていない。党は表面上、自連の立場を継承していたので、サンジカリズム批判の際盛んに引用された

マラテスタをいま一度登場させ、逆手を取らざるを得なかったであろう。

続いて、テーゼはクラウセヴィッツに依拠しながら、次のように述べる。

「社会革命は急激で全面的な武力的、組織的、イデオロギー的闘争の過程」であり、「闘争なるが故にあらゆる強制化を最も無慈悲的に発揮されるのである。……ブルジョアが組織された暴力によって、すなわち政治的権力によって自己を防衛し、かつ労働者農民に圧迫を加えているのであるからこれを取り除くためには、われわれ自身を、より強固に防衛し、かつ攻撃し、彼らの政治的権力を破壊しなくてはならない」

革命をめざす限り、これは論議の余地のない命題であろう。ブルジョアにブルジョアとしての自由を認めたのでは、革命などありえようもないのだ。

そして、ここからストレートに権力掌握の必要性が主張される。

「そのためにはわれわれ自身政治的権力を占有しなくてはならないのである。われわれ自身組織された暴力を行使しなくてはならないのだ。政治的権力はブルジョアがその権力から離れた時さえ強力であることによって

われわれ自身把握する必要がある。それは国際的に結合した資本の強さ、その知識や、政治的技術において彼らが優れていること、私有制とブルジョアジーは全面的に経済をわれわれがにぎる以外には再生産されること、これらの理由によって権力の把握は必要なのである」

ここに至って、無政府共産党は社会革命遂行の観点から、既成のアナキズムに訣別する。革命の勝利のために権力掌握は必要であり、権力掌握はもはやタブーにしておいてはならないというのである。

党は、権力の把握を認め、既成のアナキズムのイデオロギーから離れたわけだが、それ以上に重要なことは、アナキズムというイデオロギーの枠内での思考から自らを解放し、社会革命の遂行という座標軸を獲得したことであろう。いわば、教義としてのアナキズムからの訣別である。

だが、こう見てくると、レーニンもそうだが、わが日本無政府共産党の権力掌握の論理もはなだ機能主義的である。「政治権力を把握せんとすることは、単に、物理学の法則を知るがため」であり、また「全国における新しき自主的な経済建設を防衛せんがためである。画一的な経済建設を廃して地方自治的なそしてその連合によ

る経済の再組織をブルジョアの反動から防衛するため」だ、というのである。

これではあまりに機能的すぎて、「政治権力」が単なる「組織された暴力」なのか、「プロレタリア国家」なのか、わからないほどである。相沢の回想は「プロレタリア独裁国家を建設しようとする企図」の武力的潰滅のためという側面を強調している（九二頁）が、テーゼをよく読めば、レーニンとは違う意味であるが、プロレタリア国家を認めていることは明らかであろう。もとより、その権力の「永久化を求めるためではなく、それらを放棄せんため」はあるが。（相沢が強調したかったのは、かかる結論に至るモチーフであり、また「自ら権力を廃棄する」ことは「権力を否定する思想以外には不可能である」との確信であろう。）

他に意識の不均等発展から説明した個所もあるが（一八七頁）、いずれにせよ、機能主義的なし政治力学主義的印象は拭い去り難い。権力はあくまで所与のものとしてあり、主体と無関係に利用できるかのようである。

それでは党は完全に政治力学主義に墮してしまっただけかというところ、危ういところと踏みとどまり、権力廃絶の論理を次のように展開する。

「プロレタリア国家は自らの権力の強化、少数者への集中、永久化の過程と、排除の実際的基礎としての経済的發展を含んでいるのである。

この矛盾は、唯漸進的發展Ⅱ全人民のプロレタリア化、単一階級化Ⅱとその飛躍Ⅱ廃棄Ⅱによってのみ解決されるのである。それはレーニンの言うごとく、漸進的發展によって何時とはなしに「死滅」することによって解決されるのではなく、むしろ支配者となれる全人民の「廃棄」のための不断の闘争Ⅱ政治的、経済的、文化的、道徳的、社会的Ⅱによってのみ解決されるのである。飛躍なくして権力の消滅は絶対にあり得ない」（一九三頁）

この展開は、素描の域を出ないといえ、重要な示唆を含んでいる。まず、プロレタリア国家といえどもやはり権力の集中化・永久化へ向かう性質を内に秘めていることの確認であるが、これは従来もアナキストがロシア革命の変質を踏まえつつポリシエヴィキ批判として執拗に繰り返してきたものであった。しかし、無政府共産党はその指摘にとどまらず（ただし、なぜ集中化・永久化するかは解明していない）、『国家と革命』におけるレーニンのオブティミズムを革命的に超えようと試みる。過

渡期を国家権力の漸進的死滅過程としてではなく、プロレタリア国家の矛盾をめぐるダイナミックな闘争の過程として捉えるのである。そこで、漸進的發展のみならず、飛躍Ⅱ廃棄を必要とし、とりわけ全人民の廃棄のための不断の闘争によってのみ解決されとしたことは、アナキズム、ポリシエヴィズムを問わず従来の過渡期論を一気に超えるすぐれた発想であろう（過渡期に関し、スターリンの階級闘争激化論は論外として、毛沢東は階級矛盾と階級闘争が存在する長い歴史的段階としているが、いずれも資本主義復活に対する闘争としてしか捉えられていないようだ）。

従来の革命運動は、権力奪取に至るまではきわめて現実主義的政治主義的にアプローチしながら、革命以後に関しは、ユートピアにせよ逆ユートピアにせよ、ひどく平板な観念論に陥る通弊を免れていない。コミンテルン以後の各国共産党に至っては、革命以後の権力問題はほとんど忘れられていた。そうした中で、無政府共産党が権力廃絶の過程を視野に収め、不十分ながらダイナミックに解明しようとしていたことは、高く評価すべきであらう。

だが、過渡期論における卓抜した発想も、党組織論で

はまったく生かされず、先に指摘した機能主義的傾向がさらに露骨に現われ、その欠陥を曝け出すことになる。

テーゼによれば、社会革命にも決戦があり、「この決戦に味方の力を集結し得る者は、ただ各地における革命的闘争（収用と行政権の獲得）を全体的に見透し得る位置にある者のみである。それは司令部の必要を示している。党とその優れた中央部のみがこの任務を果たし得るのである」。しかも帝国主義の時代においては、労働者と農民は同一水準に立って結合しなければ、その解放はありえず、「かかる情勢は革命的党の新しい建設を要求する。かかる新しい党のみが、すなわち労働者農民を政治的権力の獲得に向かわしめ得るだけの果敢さとあらゆる革命途上における環境の複雑な状態において指導を誤らぬだけ十分な経験を持ち、目的に向かつてのすべての障害を排除するだけの十分な弾力性あるところの自ら武装せる党のみが労働者農民の革命的な階級的任務をはたし得るのである。かかる党なくして革命の勝利はあり得ない。かかる新しい党が無政府共産党である」（一九七頁）

この党の特質は、「まず第一に労働者農民の前衛」でなければならず、「労働者農民と密接に結合していなく

てはならない」。そして、党外の大衆を指導するためには、「党自身が規律と組織の具体化であり労働者農民の組織部隊」でなければならない。具体的には、「厳格なる党員の資格」を決定し、党内には「上下の指導機関があり、少数者は多数者に服従し、実践上の決定はすべての党員に対して拘束的」でなければならない。「鋼鉄のごとき規律ある党はただ党内に意志の統一があつてのみ可能である」から、「分派の存在」は許されないことになる。そればかりではなく、「党は職業的革命家によってのみ構成さるべき」だ、というのである。

これでは、最後に「かかる権力（プロレタリア国家を指す——蓮台寺）、かかる党が常にその目的ではなく、一個の手段であることを深く認識してのみ労働者農民の解放のための闘争を具体的に指導し、具体的に自己批判し、正しきものを摂取し得るのである。それ故に党は無政府主義者の党でなければならない」と付け加えてはいるものの、党組織論はレーニン主義への屈服と言わざるを得まい。

「マルクス、レーニンの思想でも正しいものは取り入れるべき」とはいうまでもないが、この党組織論では、廃絶か死滅かというイデオロギーの内容は異なるが、わ

れわれのみが唯一の前衛であるという意味で根本的にポリシエヴィキと同一次元の党派性に陥るのであり、またスターリニズムの疎外への歯止めも欠けているのである。一九二一年の分派禁止がスターリニズムに道を開いたことは今や常識といつてよいだろう。

無政府共産党は機能主義によって、イデオロギーの呪縛を超えて社会革命論を展開し、従来のアナキズムが把握しえなかった革命の勝利以後の過渡期の論理を展開することができた。しかし、同じ機能主義故に、ポリシエヴィキと同じ党組織論、同じ次元の党派性に陥つたのであった。

機能主義の欠陥は、すでに指摘したように、権力の把握が一面的にしかなされないとある。権力の物理的、実体的側面は把握されても、関係的、本質的把握はなされないのである。情況の切迫から、党は主として機能主義的にしかアプローチしえず、本質的把握をするゆとりがなかったといえよう。しかし、革命と権力の問題を考える場合、これは致命的な弱点となりかねないものである（党のロシア革命批判が、大杉のように革命主体の立場からなされず、現象的政策的な印象が強いのも、これと無関係ではないだろう）。

否定し、二段階革命論から天皇制打倒を前面に押し出したものであるが、「戦略戦術」の場合はその意味合いがあるわけではない。むしろ、大衆組織に関しては日共の犯した誤りを避けようとする配慮が見られ「二二九頁」、当面する革命を「労働者農民革命」としていることは、コミンテルンの分析を採りながら、無政府共産党独自の戦略を提示しようとしたものであろう。特徴の第二は、帝国主義戦争に対するほぼ的確な見通しと原則的に正当な反戦闘争の提起である。この素材を「より果敢なる実践と、より真摯な検討を通じて」鍛錬した時、「戦線の飛躍的發展」がなされる可能性は確かにあったに違いない。だが、このパンフレットの刊行（三〇年八月）後数カ月を経ずして、党は半ば機能マヒに陥り、さらに権力の徹底的弾圧をこうむるのである。

4

無政府共産党は、活動開始後わずか二年余で一斉検挙によって、意外に簡単に壊滅してしまふ。党の組織活動が停止したのみならず、党そのものが壊滅し、戦後に至つてもついに再建されることはなかった。自らの武装を主張し、権力奪取・廃絶を視野に入れた党にしては、い

党は、国家廃絶の論理を展開する際に、正當にも「全人民の闘争」を国家権力に対置した。この発想が貫かれ、深められていけば、こうした誤りは避けられたものと思われる。権力は主体と無関係に存在するのではなく、主体との拮抗関係で消滅するのであり、さらにいえば主体は権力を自己権力として奪還しなければならぬのである。

無政府共産党の論理は、そうした自己権力論の視点を導入すること、その欠陥を大幅に克服し、革命主体と革命権力、さらに媒介としての党の関係をよりいっそう明確にし、主体との関係で自己否定性を自ら保障する党派性を獲得できるのではないだろうか。

ここで、「プロレタリアの戦略戦術」について簡単にふれておこう。

「戦略戦術」の特徴の第一は、現状分析の方法としてマルクス経済学を大胆に採り入れていることである。その日本支配体制の分析がコミンテルンの「日本に於ける情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」（いわゆる三二年テーゼ）をベースにしていることは、両者を比較すれば一目瞭然である。もともと、三二年テーゼは、当面する革命をプロレタリア革命とした「政治テーゼ草案」を

ささかあつけない幕切れと言わざるを得ない。

かかる崩壊の主体的根拠は、直接的には、植村が言うように「特務機関の独走」にあるが、根本的には、党結成時からの構成の歪みに求むべきであらう。

無政府共産党は、当初から秘密の保持に相当な神経を使い、そのために寺尾を除名し芝原の殺害まであえてした。しかし、党そのものの構成に関しては、テーゼその他の規定にもかかわらず、意外に関心が払われていなかったように思われる。

前掲の『身上調査書』によれば、一九三三年五月に二見、寺尾、三井、坪田らによって結成された「日本革命的無政府主義者協会」は、党の前身である「日本無政府主義者連盟」および党と三四年二月頃協会が解消されるまで一種二重組織的狀態にあったものと推定され、その協会のメンバーが後に特務機関を主要に構成するのである。二見らの真意がどこにあったか、いまとなつては知るよしもないが、「意志の統一」を主張した党にしては奇妙な話である。寺尾や芝原を入党させたのも、「厳格な資格」からみれば明らかに誤りであらう。

しかし、党の構成の歪みは、そうした個々のメンバーの問題にとどまりはしない。より大きな問題は、党が労

働者・農民から離れたところで形成され、その外側から運動を指導しようとしたところにあったのである。

「われわれは何から始めるべきか？」と自問し、「これに対する原則的な答えは『革命家の組織』をつくることから一切の仕事は始めるべきである」（二〇三頁）とした時、この歪みが合理化され、手段であるはずの党が主体を離れて自己展開を開始したのであった。特務機関の独走も同じ根から生じたものであらう。

この歪みが、官憲の壊滅作戦を喰い、運動総体の組織活動の経験不足によって増幅された時、党は全国自連もろとも自らの亀裂に飲みこまれてしまったのである。

5

△無政府（共産）▽と△党▽が互いに全く相容れない概念であることは、今日では、ほとんど自明のこととされている。その対立は、前者に△アナキー▽後者に△パルタイ▽とルビを付れば、いつそう鮮明にならう。このニュアンスは、社会主義運動の歴史的コンテクストを踏まえているだけに、容易なことでは揺らぎそうにないのである。

無政府共産党の魅力は、そうしたコンテクストを無視

し、最高の理想社会としての△無政府（共産）▽と目的実現のための強力な手段としての△党▽を直截に結びつけたところにある。しかも、自ら権力を把握し、かつ「廃絶すると宣言したのである。

そこには、無論それなりの論拠があり、またすでに指摘したようにいくつかの難点も見出される。しかし、そのイデオロギー的呪縛を断ち切って社会革命を追求する積極性のなかにこそ、われわれの未来を拓くカギが秘められているのではないだろうか。

少なくとも未だ無政府共産党の問題意識をこえる運動を創出しえていないことの確認のうえに、われわれは党の提起した問題に正面から答えていかなければなるまい。

無政府共産党は、魅力に満ちた、だが乗りこえるべき先駆的運動なのである。

日本無政府共産党

一九七四年六月二〇日 第一刷

定価——一五〇〇円 ©1974

著者——相沢尚夫他

発行者——相沢尚夫

発行所——株式会社 海燕書房

東京都千代田区内神田一—四—六 三洋ビル

電話（〇三）二九三—九九三一 振替東京一—八二二九

印刷所——有限会社丸橋印刷 製本所——土開製本株式会社

乱丁・落丁本はお取りかえいたします